

鬼首地区の活性化に向けたスナッグゴルフの普及と定着を目指して ～ “結（ゆい）の心” でまちづくり スナッグゴルフで地域をつなぐ～

鬼首地域づくり委員会 (2012、2013年、2014年 実践助成)

話し手：高橋一義さん(鬼首地区公民館館長生涯学習推進員)
小石俊聡さん(鬼首小学校校長)



左から NPO法人鬼首山学校協議会 大沼幸男さん、高橋さん、小石さん

●何故この活動に取り組もうと思われたのですか？

高橋：きっかけは、鬼首小学校の村石前校長が、東日本大震災直後に、日本プロゴルファー協会が沿岸部の小学校にスナッグゴルフの道具を寄贈していることを知り、ここでもできるのではないかと、協会にかけあって道具が一式、小学校に来たことです。そして、スナッグゴルフを誰でもできるスポーツとして地域にも根付かせたいと考えて、この助成にたどりついたようです。

時期を同じくして平成 24 年 10 月から鬼首公民館に指定管理者制度が導入され、鬼首地域づくり委員会を窓口、公民館主導でスナッグゴルフを広めるプロジェクトをやることになりました。最初は「スナッグゴルフって何？」というところから、子ども達の練習会を開き、そこに大人達にも少しずつ来てもらうようになり、3年目を迎えました。子どもの方があっという間に上達して、2年目には全国大会に出場しました。

小石：スナッグゴルフ (Starting New At Golf) は、ゴルフの入門段階のスポーツとして、アメリカのプロゴルファーが開発したのですが、その特性は老若男女誰にでもでき、かつゴルフの醍醐味が味わえることです。大人なら 100m 近くボールが飛びますし、グリーンに上がればパターを使います。ボールはゴルフボールとほぼ同じ重さ、テニスボール大で当たりやすいので初めてでも苦にならない。ランチャーは 7 番アイアンと同じつくりです。穴に入れる代わりにフラッグにくっ付ければいいので、グリーンを読めなくても勢いで狙ってできる。

楽しくなるように道具が設計されており、ゴルフをやっている大人でも面白いです。子どもに負けたくないと思っ

鳴子温泉郷の山間にあり、かつては温泉客やスキー客で賑わい、大規模なリゾート開発も行われた鬼首地区。地区の中心にある鬼首小学校では 19 名の児童が学んでいます。3 年前、小学校を拠点にスナッグゴルフを普及するプロジェクトがスタートしました。過疎化が進むなか、子どもからお年寄りまで皆が楽しめるスポーツ交流でまちを元気にと地域の人たちが知恵と汗を出し合っています。

活動の先頭に立つ高橋一義生涯学習指導員と小石俊聡校長にお話を伺いました。



スナッグゴルフの道具

はプロのトーナメントゴルファーよりスコアを出しますから。また、運動が得意ではない子

も活躍できるし、それが自信になる。子どもは夢中になり、お母さんにもできます。過疎が進む集落で、おじいちゃん、おばあちゃんも元気に、地域全体を元気にという取り組みのなかで、皆に浸透する可能性が十分にあるスポーツです。

●なぜコミュニティスポーツ推進助成プログラムに応募されたのですか？

小石：学校を地域の核として位置づけ、地域全体で子ども達も含めてできること、それにはスナッグゴルフがぴったりだと。本物のゴルフだとしてできる人が限られますが、スポーツ経験のない 80 歳近い方でも楽しさを味わえるコミュニティスポーツとして有効だと、前任の校長先生が判断されたからだと思います。

高橋：スナッグゴルフの大会では、大人と子どもを合わせたグループをつくり、大人がスコアをつけてラウンドを回ります。鬼首地区の児童は 19 人、近所に子どもがいないお年寄りがたくさんいるんですね。「あんだ、何処の孫っしゃ？」という会話がができるのは嬉しいことです。公民館としても子どもとの接点をいかに持ち続けるか、そのような場をつくる手段は多い方がいいですから、そのひとつとしてスナッグゴルフをもっと定着させていきたいと考えています。

●コミュニティスポーツとしての活動の意義は何ですか？

小石：技術の上達というより、皆が楽しく参加することで、親子、家族、近所同士の会話が增えることですね。鬼首のまちが元気になるひとつのきっかけとして、スナッグゴルフが役に立てればという想が一番強いです。

高橋：大会に三世代で参加してくれるのを見ると、こち





左 スナッグゴルフの練習風景 右 スナッグゴルフ大会の様子

らが嬉しくなります。幅広い年齢層で楽しめるスポーツはそう多くありません。

●活動の成果や課題についてはどうですか？

高橋：1年目はスナッグゴルフをいかに知ってもらうかに苦労しました。とっかかりは子どもから、子どもがやるのを見て大人が「何をやってるんだらう？」と思ってもらえるように、ゴルフ場を借りて校内大会を開催したり、荒雄湖畔公園に専用の常設コースを設けました。2年目には親の参加、そこから高齢者や地域の人参加が徐々に増えてきました。

大人の参加者を増やすことは3年目も課題です。地区人口は1050人を切り、そのうち小中学生は50人いるかいないかです。毎回の教室に10人程度が集まりますが、リピーターが中心で、初めての人に来てもらうための工夫をしていきたいと思っています。9ホールを回る大会が年2回、ニアピン大会が年1回あり、小学生からお年寄りまで参加できます。全国大会は仙台ヒルズゴルフ倶楽部という本物のゴルフ場でやります。ただ、冬は雪が深く外で練習できないのが苦しいです。

●活動の成果や課題についてはどうですか？

小石：鬼首地区では限界があるので、鳴子地域に広げられないかと考えています。鳴子地域は河川敷の芝生がたくさんあるので、鳴子小学校と川渡小学校も入れて学校対抗ができないかと考えています。その前に教職員に楽しさを知ってもらおうかと、校長会では話が進んでいません。

高橋：今年4月、鳴子公民館主催のニュースポーツ大会にスナッグゴルフを取り入れてもらい、鳴子の河川敷にコースをつくって体験会をしました。鳴子や川渡のスポーツ推進委員にも集まってもらいましたが、評判がとてもよかったです。

そこで鳴子公民館の方で常設コースをつくらうかという話が出ているのですが、資金面で課題があります。この助成金の予算枠では難しい。公民館の事業費は限られており、私たちの常設コースも自分が芝を刈り、フラッグは手作りです。無料体験や道具の管理は、NPO法人鬼首山学校協議会にお願いして、助成金で賄っています。

小石：まちおこしということでは、鳴子地域の外からも来てもらいたいと思っています。一昨年から「集まれ！鳴子ダム」というお祭りの種目に加えてもらい、県内の親子連れにも広めようとしています。

高橋：いつかは県大会や東北大会を鳴子地域で開けたらいいのですが、お金の問題もあり、ゴルフ場の協力や宿泊のことなどは、公民館だけで企画するのは難しいです。また、今後を考えると、もう少し子どもが増えないと…残念ながら今年は仙台の全国大会に出られないのです。メンバー6名は原則4年生が中心という規定がありますが、うちには4年生が1人しかいません。

人数が足りないので学校合同でチームをつくることも視野に入れたいですが、鳴子・川渡はこれからですし、道具を揃えるところから始めるので簡単にはいかないと思います。でも、夢としては鳴子・川渡にチームができ、鳴子地域の大会ができ、鳴子・川渡地区は子どもの数が多いので、タッグを組んで全国大会に出場できたらいいですね。スナッグゴルフはまだ競技人口が少ないので、出るチャンスがあるのです。やはり全国大会を経験すると子ども達は違ってきます。

小石：児童が19名と小さい学校で、子どもは多くの人と接する機会があまりありません。自分の知らない人と競争して、勝つにせよ負けるにせよ、その喜びなり悔しさなりは教科書だけでは決して学べません。教育の面から見て、とても大事だと考えています。その点で、スナッグゴルフは子どもにとっていいものだと思います。だからこそ広めたい。「スナッグゴルフって何？」という人を一人でも減らしたいのです。

<インタビューを終えて>

訪問した日、放課後の小学校に子どもと保護者、地域の人たちが集まってきた。緑に囲まれたグラウンドにスナッグゴルフを練習する子ども達の声が響く。冬は背丈程の雪が積もり、先生達が校庭の圧雪をして、子ども達はクロスカントリーをするそうだ。子は地域の宝と言うが、子どもの育ちを見守る地域の温かさを感じた。子どもが達成感や自信を得る経験を重ね、お年寄りも含めて皆が笑顔で交流できるスポーツとして、スナッグゴルフを定着させたい。鬼首地区の学校や公民館、NPOが協働して地区の外へも活動の輪を広げていく原動力は、地域に根づく“結”の心である。その支え合いの精神は、コミュニティ再生への鍵となろう。

“スポーツは結びつけ、命を与える”という先人の言葉にもあるように、この取り組みは、世代をつなぎ、地域をつなぎ、元気なまちづくりを目指すコミュニティスポーツの好例である。

[インタビュー・2015年6月2日(火) 於：大崎市鬼首小学校(大崎市鳴子温泉鬼首) 文責：帝京大学沖永総合研究所 谷本都栄]

—団体概要—

鬼首地域づくり委員会(宮城県大崎市)

鬼首地域づくり委員会は、地区における課題を住民の意思に基づき自主的に解決し、良好な地域社会の維持及び地域の発展に資することを目的として2006年に設立された。地域住民の意思を集約して市政に参画する活動をはじめ、結(ゆい)の心で支え合う地域を目指した活動を実施してきた。平成24年10月より指定管理者として鬼首地区公民館の管理運営を行っている。